

注意しよう 危険な生物



千葉県立鴨川青少年自然の家

研修項目	危険な生物
宿泊室	ヌカカ (1) ブユ (2) 蚊 (3)
カッター シーカヤック 野外炊事 キャンプファイヤー キャンドルサービス ナイトハイキング キャンプ 天体観測 花火	ヌカカ (1) ブユ (2) 蚊 (3) アブ (4) ムカデ (9) アオバアリガタハネカクシ (やけど虫) (6) ハチ (7)
お弁当 (屋外)	ヌカカ (1) ブユ (2) 蚊 (3) アブ (4) 毒ヘビ (12) トビ (14)
ウォークラリー	ヌカカ (1) ブユ (2) 蚊 (3) アブ (4) ドクガ (チャドクガ) (5) アオバアリガタハネカクシ (やけど虫) (6) ハチ (7) マダニ (8) カエル (10) セアカコケグモ (11) 毒ヘビ (12) ヤマビル (13) 毒キノコ (15) うるし類 (16)
磯遊び・磯観察・砂の造形 釣り 海水浴・ビーチバレー	ヌカカ (1) ブユ (2) 蚊 (3) アブ (4) イソギンチャク (17) ウニ (18) オコゼ (19) アイゴ (20) ゴンズイ (21) クラゲ (22) ウツボ (23) ヒョウモンダコ (24) アカエイ (25) イモガイ (26)
鴨川市内ウォーキング、文化財巡り、自然散策、研修施設など (海・里山)、 (キャンプ)	ヌカカ (1) ブユ (2) 蚊 (3) アブ (4) ドクガ (チャドクガ) (5) アオバアリガタハネカクシ (やけど虫) (6) ハチ (7) マダニ (8) カエル (10) セアカコケグモ (11) 毒ヘビ (12) ヤマビル (13) 毒キノコ (15) うるし類 (16) イソギンチャク (17) ウニ (18) オコゼ (19) アイゴ (20) ゴンズイ (21) クラゲ (22) ウツボ (23) ヒョウモンダコ (24) アカエイ (25) イモガイ (26)
参考	トコジラミ (27) ノミ (28) ツメダニ (29) トリサシダニ (30) イエダニ (31) ヒゼンダニ (32) ツツガムシ (33)

危険な生物

1 ヌカカ

ヌカカ（糠蚊）は、ハエ目（双翅目）・ヌカカ科（Ceratopogonidae）に属する昆虫の総称。体長が1mm-数mmほどの小型昆虫で、一部の種類のメスは蚊と同様に吸血動物となる。

和名のヌカカは、「糠粒のように小さい蚊」という意味から命名された。地域によってはイソヌカカ（磯糠蚊）やヌカガ（糠蛾）、カンタクムシ（干拓虫）と呼ばれている。夏の水辺などをひと塊になって飛んでいる。

上から見た感じは黒ゴマの粒のように見え、よく観察すると薄く透明な翅に、黒い斑紋を装うものが多い。

磯やキャンプ場などに棲息しており、身体が小さいために網戸などを抜けて人家に侵入することもある。蚊と異なり、刺咬された直後は刺された感触もなくほとんど痒みはないが、翌日以降に腫れと痒みが起こり、小さな水ぶくれができることもある。完治まで1週間以上かかることもある。

対処法としては、皮膚科医の診察を受けることである。医療機関では、炎症やアレルギー反応を抑える錠剤、痒みを抑える錠剤とプロピオン酸クロバゾール軟膏を処方することが多い。

虫除けとしては、ジエチルトルアミド（ディート）を配した虫よけスプレーが有効といわれる。
（ウィキペディアから引用）



出典：Copyright ぽち

さんのひとりごと , 2015 All Rights Reserved.

小さな厄介者、ヌカカ

ヌカカはその小ささがゆえ、頭髮の中にもぐり込んだり、衣服の隙間からも侵入して吸血します。皮膚は出来る限り衣服で覆い、ディートを配した虫除けスプレーを袖口、首筋などの露出部位に予め塗っておきましょう。

（引用：YAMA HACK）



（出典：LH00N/Voracious midges/ありんこ日記）

2 ブユ (ブヨ)

成虫は、イエバエの4分の1ほどの小ささ(約3~5mm)で透明な羽を持ち、体は黒っぽく丸まったような形をしているものが多い。天敵はトンボなど。

一年中活動するが、特に春から夏(3月~9月)にかけて活発に活動する。夏場は気温の低い朝夕に発生し、昼間はあまり活動しない。ただし曇りや雨など湿気が高く日射や気温が低い時は時間に関係なく発生する。また、黒や紺などの暗い色の衣服や雨合羽には寄ってくるが、黄色やオレンジなどの明るい色の衣服や雨合羽には比較的寄ってこない。ブユの幼虫は溪流で生活しているため、成虫は溪流の近くや山中、そうした自然環境に近いキャンプ場などで多く見られる。また、幼虫は清潔な水質の指標昆虫となるほど水質汚染に弱いため、住宅地などではほとんど見られない。

ブユの害

カやアブと同じくメスだけが吸血するが、それらと違い吸血の際は皮膚を噛み切り吸血するので、多少の痛みを伴い、中心に赤い出血点や流血、水ぶくれが現れる。その際に唾液腺から毒素を注入するため、吸血直後はそれ程かゆみは感じなくても、翌日以降に(アレルギー等、体質に大きく関係するが)患部が通常の2~3倍ほどに赤く膨れ上がり激しい痒みや疼痛、発熱の症状が1~2週間程現れる(ブユ刺咬症、ブユ刺症)。体質や咬まれた部位により腫れが1ヵ月以上ひかないこともままあり、慢性痒疹の状態になってしまうと完治まで数年に及ぶことすらある。多く吸血されるなどした場合はリンパ管炎やリンパ節炎を併発したり呼吸困難などで重篤状態に陥ることもある。

予防に関しては、一般的なカ用の虫除けスプレー等は効果が薄いので、ブユ専用のものを使うことが有効である(ハッカ油の水溶液でもよい)。また長袖や長ズボン、手甲や脚絆などを身につけ、素肌を露出させないことも重要である。吸血された場合は傷口から毒を抜いてステロイド系の薬(ステロイド外用薬)を塗る。また、掻くと腫れが一向に引かなくなり(結節性痒疹)、治ったあともシミとして残るので、決して傷口を触らないことである。(ウィキペディアから引用)



磯ブヨとイソヌカ蚊

通称磯ブヨと呼んでいますが、2種類います。

黒褐色で体長が1.5ミリほどのイソヌカカ(磯糠蚊)と体長2~4ミリほどの磯ブヨです。

黒褐色で体長が1.5ミリほどのイソヌカカ(磯糠蚊)と体長2~4ミリほどの磯ブヨです。

イソヌカカは、波による塩水と

雨水が交じり合った砂泥の中に、また、磯ブヨは防波堤などの海水と雨水が混じった水溜りや溪流などに発生するため、釣りや野外レジャーの際に刺されます。ヌカカやブヨは朝夕のマズメや夜間に活動することが多く、特に露出したスネ付近や手の指間を刺される人が多いようです。

いずれも吸血性の昆虫ですが、中枢神経を一時的に麻痺させるために毒性の成分を注入するようです。

いったん刺されると、2週間ほど患部が赤く腫上がり猛烈な痒みに襲われます。



©社団法人日本皮膚科学会



夏場の釣りは暑さから、半袖に半ズボンでと考えがちですが、これらの害虫や紫外線から身を守るためには、長袖に長ズボンを着用して手袋をするなど、出来るだけ露出しないようにしましょう。

また、露出している顔や手足には防虫スプレーを噴射して防御するとともに、刺された場合は掻かずに、抗ヒスタミンを含有したステロイド系の軟膏をすり込むと症状が改善しますが、重症の場合は、早めに皮膚科で受診してください。（磯ブヨ関連サイト(社)日本皮膚科学会から引用）

3 カ (蚊)

蚊のほとんどの種が吸血性で、マラリア、フィラリア、黄熱、デング熱、脳炎などの危険な感染症の媒介者でもあります。しかし、蚊はただ生きるだけなら吸血を必要とせず、砂糖水だけで生き続けることができます。

雌成虫は、羽化してから休止→吸血→休止→産卵→再吸血といった活動リズムを持ちます。

吸血活動は夜間活動性と昼間活動性の2つに大きく分けられ、イエカ属・ヌマカ属・ハマダラカ属は主に夜間吸血性で、ヤブカ属は主に昼間吸血性と属によって異なります。

アカイエカ

アカイエカ最も普通な種類の蚊です。成虫の体長は約 5.5mm。日本のイエカ属の代表的な種類で、褐色（茶色）の蚊で、寝ている時に蚊で起こされる時は、多くの場合がこの蚊です。日本では、北海道から九州まで分布していますが、琉球、奄美、小笠原などでは近縁のネッタイイエカが分布。



発生場所は、どぶや汚水だめ、下水溝、汚れた雨水ます、用水桶などやや汚いところに発生が多い。越冬は成虫で行い、寿命も約 6 ヶ月と非常に長い蚊です。本種は人からもよく吸血しますが、鳥類、特に鶏を選好する傾向にあります。また、フィラリア症を媒介する種になり、犬のフィラリアをうつすため注意が必要です。

チカイエカ

チカイエカ成虫の体長は約 5mm で、形態的にアカイエカに非常に似ていて、肉眼では区別できません。日本、ヨーロッパ、中近東、北アメリカに分布。

本種は、1 度目の産卵を無吸血で行なうことができ、血を吸わなくても増えることができる特徴があります。

本種は、ビルの地下の水溜りや水洗便所の浄化槽、地下鉄の線路際の溝などに発生することが多い。低温に強く、秋になっても休眠せず初冬でも活動します。冬になっても蚊に刺されるとするのは本種が原因です。



ヒトスジシマカ

ヒトスジシマカヤブカ属の中では最も代表的な種。成虫の体長は約 4.5mm で黒色に白色のシマ模様をもちます。日本では関東以西に普通に分布。幼虫の生息場所は、花立、用水桶、竹やぶの切り口、空き瓶、空き缶などと様々な所にいます。

卵は乾燥に強く、湿った落ち葉やコケなどに分散して産み付けられます。通常、卵で越冬しますが、南九州では一部幼虫越冬も行なう。本種は、デング熱ウイルスの媒介者として有名です。



（虫知識.COM から引用）

4 アブ

害虫としてのアブ

ウシアブ、およびイヨシロオビアブなどのメスは、血を吸う害虫として忌み嫌われている。刺された瞬間、チクッというような痛みがあり、アブに刺されたことがすぐにわかる。個人差があるが、一般的に強いかゆみがある。アレルギーがある場合、化膿し水ぶくれができることがある。ムシヒキアブ科、ことにシオヤアブは脊椎動物にも向かっていく反面、幼虫も成虫も他の虫を積極的に捕食することから益虫としての面も持つ。

(ウィキペディアから引用)



5 ドクガ チョウ目ドクガ科に分類されるガおよびその総称

ドクガ(毒蛾)は、チョウ目ドクガ科に分類されるガおよびその総称である。全長オス 1.4 - 1.7cm、メス 1.9 - 2.2cm。翅は褐色で、前翅に濃色の縦縞と先端部に黒い斑点が 2 対入る。幼虫の体色は黒く、背面にオレンジ色の筋模様が入る。2 齢以降の幼虫は鋭い毒針毛を持つ。成虫や蛹に毒針毛は生えていないが、幼虫の毒針毛が付着(成虫は尾毛、蛹は繭)しているため、触れると毒針毛による被害を受ける。

毒針毛が皮膚に触れると、赤く腫れあがりかぶれる。かゆみは数週間続く。

成虫の発生期は 6 - 8 月。

食性は植物食で、幼虫はカキ、コナラ、ハマナス、イタドリ、サクラなどの植物の葉を食べる。成虫は何も食べない。

繁殖形態は卵生。卵にも成虫の尾毛から毒針毛が付着し、そのため孵化後まもない幼虫も毒針毛が付着する。幼虫の状態で集団越冬する。

実はこの毒針毛は孵化後には、幼虫時代の時のみに発達し、蛹の時には繭の周囲に毒針毛を張り巡らし、羽化した後にも、毒針毛を羽根に付着させ、産卵する時にも毒針毛を卵の周囲に張り巡らせる。

蛾の多くは幼虫時代は有毒種でも、成虫になると、毒を持つことはなくなるが、ドクガやチャドクガの場合は、一生の全てを毒で武装して身を守る。

都市部などでも植樹などに生息し、触れる、または風に毒針毛が飛ばされることで直接触れなくても毒針毛による被害を受けることもある。被害を受けた場合は毒針毛が皮膚に深く刺さらない様に患部をかきむしったりせず、セロハンテープなどで付着した毒針毛を取り除いたり患部を冷水で洗い流す。駆除した生体は放置すると風により毒針毛が散布される可能性があるため、土に埋めるのがよい。

毒蛾(モンシロドクガ、トラサンドクガ、ゴマフリドクガ、キドクガ、ドクガ、チャドクガ、フタホシドクガ、マガリキドクガ)

(ウィキペディアから引用)

チャドクガ



チャドクガは、日本を代表する毒蛾です。お茶の木などツバキ科の葉に発生することから茶毒蛾とよばれています。幼虫期はいわゆる毛虫と呼ばれる外見で、毒針毛と呼ばれる目に見えない毒針が体を覆っています。この幼虫に触れることで皮膚炎などの被害が引き起こされるのです。幼虫は葉の裏に密集しいっせいに葉を食べます。食欲は非常に旺盛です。

○好物：チャノキ、ツバキ、サザンカ等のツバキ科の葉

○発生時期：4～10月の間に2回生まれる



チャドクガの症状は刺されてすぐに表れます。毒針毛に触れた部分がかゆみとともに赤く腫れ、1～2日後には赤い発疹が広がります。かゆみは人により差がありますが2～3週間程度続きます。一度刺されると毒成分の抗体が体内で形成されてしまい、2度目以降はアレルギー反応を起こし症状がひどくなる場合もあります。

【やってはいけない対処法】

- ・手で毒針毛を取る→他の皮膚へ被害拡大の恐れがあります。
- ・こする・掻くや→患部を広げてしまう
- ・刺された時の洋服を洗濯機で洗う→毒針毛が他の服へ着いてしまう。

【正しい治療・対処方法】

- ・ガムテープで毒針を取り除く→触れた周辺にガムテープを斜めに貼り、そっと取り除く。
- ・強い流水、泡立てた石鹸で洗い流す→ごしごし洗わないようにしましょう。
- ・抗ヒスタミン軟膏を塗る→アンモニアは効果がありません。
- ・毒針がついた衣類は掃除機で吸い取り、50℃の熱湯で洗う→毒針はたんぱく質なので熱湯が効果的です。

※上記方法でも症状が改善しない場合は、病院(皮膚科)へ行きましょう。

チャドクガは庭や公園の茂みなど人の生活圏からとても近いところに生息している生き物です。こうした身近なリスクであるからこそ、チャドクガの生態や、対処方法を把握しておくことが大切なのではないのでしょうか。

[YAMA HACK 登山 > 山情報 > チャドクガ / 症状や駆除法のまとめ](#) から引用

モンシロドクガ

成虫の両翅は純白で、前翅後縁部に黒褐色もしくは薄い茶色の紋があるが、時に無紋の個体もいる。開張24～39mm。幼虫の体長は約25mm。2齢以降の幼虫は、胴体の背面および側面に毒針毛をそなえる。幼虫の色彩には黒色型(バラ科食)と黄色型(クワ類食)があり、前者は寒地、後者は暖地に多いとされる。黄色型は白黄色の地に黒い斑点が縦に並び、頭と尾は赤色を帯びる。黒色型はキドクガやリンゴケンモンの幼虫に似ている。



年2～3回発生する。平地に多く、成虫は関東では5-6月、8-9月頃出現する。幼虫で越冬する。越冬した幼虫は5月下旬頃蛹化する。雌は葉裏に卵塊を産み付ける。若齢幼虫は群集するが老熟すると分散する。繭は楕円形で褐色の糸に体毛を混ぜる。繭、成虫、卵、1齢幼虫ともに終齢幼虫の毒針毛を継承するため、一生を通じ毒針毛を持つ事になる。

幼虫はサクラ、ウメ、クリ、クワなどを食草とする。

(ウィキペディアから引用)

イラガ

幼虫は通常7～8月頃、多い年は10月頃に再び見られる。体長は25mm。脚が短くずんぐりした体に多くの棘を持ち、触れるとハチに刺されたような鋭い痛みを生じる。様々な樹種で繁殖し、カキノキやサクラ、ウメ、リンゴなどのバラ科、カエデ類、ヤナギ類、クリなどの葉裏に、集団で生息していることが多い。

成虫は、羽化した後の成虫の開張は30mm程度。翅に黄色と橙色の特徴的な模様を呈する。口吻が退化しているため、成体は何も食べない。

虫刺被害と治療

幼虫に知らずに触れると激しい痛み飛び上がる。地方名のひとつ「デンキムシ（電気虫）」の由来である。これは外敵を察知した幼虫が、全身の棘の先から毒液を一斉に分泌するためである。体を光にかざすと、すべての針の先から液体が分泌されていることがわかる。刺激はかなり強く、場合によっては皮膚に水疱状の炎症を生じ、鋭い痛みの症状は1時間程度、かゆみは1週間程度続くことがある。卵をつぶしたり触れたりしてもかぶれるので注意が必要。また、種類によっては繭に毒毛を付けている物がある。刺された場合は、すぐに流水で毒液と棘を洗い流すこと。棘が残っていれば粘着テープなどで棘を除去する（患者はかなりの痛みを感じているので配慮が必要）。その後、市販の虫刺されの治療薬を塗るとよい。症状が酷い場合や目に入った場合は医師の治療を受ける。正確な毒性分は解明されていないが、ヒスタミンやささまざまな酵素を成分とした非酸性の毒だとされている。中和目的にアンモニア水を塗っても効果は無く、抗ヒスタミン剤やアロエの葉の汁を塗布するのが有効であるとされる。ひどい場合は皮膚科等で処置をする必要がある。



（ウィキペディアから引用）

6 アオバアリガタハネカクシ（やけど虫）

コウチュウ目ハネカクシ上科ハネカクシ科アリガタハネカクシ亜科に属する昆虫。名称の由来は上翅が青色であることからである。体長約7mmほどで細長く、頭部と腹部末端が黒く、その他の体節は橙赤色で、アメリカ大陸以外の世界各地に分布しており、主に温暖な湿地に生息する。

体液中に有毒物質ペデリンを含み、人間の皮膚に体液が付着すると、火ぶくれのような炎症・線状皮膚炎（ミミズ腫れ）を引き起こすことから、ヤケドムシとも呼ばれる。体液がついてから発症するまでに多少の時間がかかるため、患者はその原因が自分の肌から少し前に払い落とした小昆虫の体液にあることに気がつきにくく、突然生じるミミズ腫れに当惑することになる。

（ウィキペディアから引用）



7 ハチ（蜂）

オオスズメバチ

日本に生息するハチ類の中で最も強力な毒を持ち、かつ攻撃性も高い非常に危険な種である。オオスズメバチ日本亜種の半数致死量 (LD50) は 4.1mg/kg である。本種の攻撃方法は、毒針の他、強力な大顎で相手を噛むことで捕食対象の身体を挟む。また毒液中にはアルコールの一種からなる警報フェロモンが含まれており、巣の危機を仲間に伝える役割も果たしている。時速約 40km で飛翔することができ、狩りをする時は一日約 100km もの距離を移動することができる。

(ウィキペディアから引用)



キイロスズメバチ

攻撃性が非常に高く、巣の近くを通っただけで攻撃されることもある。特に一旦刺激を受けた巣では攻撃性が増して危険である。スズメバチ類の刺傷例では本種によるものが最も多い。

営巣初期は樹洞などの閉鎖空間に巣を作るが、巣が大きくなると軒下や樹木の枝などの解放空間に引越巣を作成する。都会に最もよく適応し、市街地でも見られる。巣は日本に生息するスズメバチの中では最大規模で、直径は 30-80cm で時に 1m、育房数 6,000-8,000 で、時に 1 万以上。働き蜂・雄蜂とも数百から千匹以上、新女王は 200-800 匹。活動期間は 5-11 月、個体数は 9-10 月に最大となり、人の刺傷例も秋に最も多い。



(ウィキペディアから引用)

アシナガバチ

アシナガバチ（脚長蜂、英: Paper wasp）は、スズメバチ科アシナガバチ亜科に属するハチの総称。

代表的な種類

- セグロアシナガバチ 体長 20-26mm。体の模様は、黒の地に黄褐色の斑紋がある。日本では北海道以外の全国に分布する。市街地でもよく見られる。刺されたらすぐ皮膚科に行くこと。
- キアシナガバチ 体長 20-26mm で、セグロアシナガバチと並ぶ大型種。日本では全国に分布する。黒の地に黄色が目立つ。攻撃性はアシナガバチとしては強い方である。
- フタモンアシナガバチ 体長 14-18mm。腹部に黄色い 2 つの斑があることからこう名付けられた。市街地でよく見られ、植物の茎や垂直な壁面等に横向きに巣を作ることが多い。
- コアシナガバチ 体長 11-17mm。やや地味で小型な種類だが、人家よりも林の低木の枝先や大きな葉の裏などに反り返った大きな巣を作る。日本では全国に分布する。
- キボシアシナガバチ 幼虫の作る繭が黄緑色をしているのが特徴。
- ヤマトアシナガバチ レッドリストでは情報不足に指定されている。



アシナガバチの生態はスズメバチに似ている。幼虫の餌も昆虫の肉とすることなど共通点が多い。細身で小型の体型は攻撃力で劣る。チョウやガの幼虫の芋虫、つまりケムシやアオムシの類を狩る。捕らえた芋虫をかみ砕いて肉団子にして巣に持ち帰る。ヤブガラシ等の花に飛来することも多い。

益虫

アシナガバチはおとなしい性格で、巣にいたずらをしなければほとんど刺してくることはない。むしろ蛾や蝶の幼虫を駆除してくれる益虫である。

巣を強く刺激したり蜂を素手で触ったりしない限りはまず刺してはこない。刺傷は子供などが巣を刺激して起こるケースと、洗濯物等に紛れ込んでいるアシナガバチに気づかず起こるケースとがある。毒はスズメバチに比べれば弱く毒そのものによる死亡は稀であるが、アナフィラキシーショックにより死亡することもあるので、過去に刺されたことがある人は注意が必要。また刺された時の痛みという点ではスズメバチよりも強いとも言われている。

(ウィキペディアから引用)

ミツバチ

ハチ目(膜翅目)・ミツバチ科(Apidae)・ミツバチ属に属する昆虫の一群で、花の蜜を加工して巣に蓄え蜂蜜とすることで知られている。現生種は世界に9種が知られ、とくにセイヨウミツバチは全世界で養蜂に用いられており24の亜種が知られている。

(ウィキペディアから引用)

性質はおとなしく、巣を強く刺激したり蜂を素手で触ったりしない限りはまず刺してはこない。過去に刺されたことがある人はアナフィラキシーショックにより死亡することもあるので、注意が必要である。



8 マダニ

マダニは吸血前は体長が数mm程度ですが吸血後には体長が1cmほどに膨れ上がります。また吸血時には吸っている血を3倍ほど濃縮して体内に摂取しているので、吸血した量の3倍ほどがマダニに吸われていることになります。

マダニは、動物の体温や呼吸から吐き出される二酸化炭素や体臭を敏感に感じ取り、動物に近づき、牙で皮膚に噛み付きます。

そして、唾液を分泌させて、宿主の体から離れられないように強く自分自身の体を接着させます。マダニの厄介なところは、取り除こうとしても体を強く固定しているので、牙だけが皮膚の内部に残ったり、マダニの体液が人間の血液中に侵入してしまうことです。マダニの感染症は、マダニの唾液に含まれている、ウィルスや病原体が原因となって引き起こされるものです。



9 ムカデ (百足)

ムカデは土壌環境で発生し生活していますが、時に人家周辺で発生したムカデが建物内に侵入して問題となります。接触すると咬まれることがあり、有害な害虫です。

日本では約 130 種類のムカデが知られ、トビズムカデやアオズムカデなどが有名です。トビズムカデは体長 10~15cm に達します。

ムカデは体型が細長く、体の各節からは脚が 1 対ずつ生え、頭部には、毒をもった巨大な顎（あご）を備えています。

毒はヒスタミンやポリペプチドを含み、咬められると蜂に刺されたような激痛を伴うため非常に危険です。

治療には抗ヒスタミン剤含有のステロイド軟膏が良いとよく言われていますが、実際には刺される前に塗らないと効果が無いそうです。腫れがひどい場合は水で湿布し、病院へ行く必要があります。

ムカデは夜行性で、昼間は倒木や石、落葉の下などに潜んでいます。家屋へはゴキブリなどの餌となる昆虫を探すため壁面に沿って侵入してくることがあります。特に 5 月頃~夏にかけて問題となります。



(虫知識.COM から引用)

10 カエル

ヒキガエル

体色は褐色、黄褐色、赤褐色などで、白や黒、褐色の帯模様が入る個体もいる。体側面に赤い斑点が入る個体が多く、背にも斑点が入る個体もいる。

ニホンヒキガエル

体長 7-17.6 センチメートル。鼓膜は小型で、眼と鼓膜間の距離は鼓膜の直径とほぼ同じ。

アズマヒキガエル

体長 6-18 センチメートル。鼓膜は大型で、眼と鼓膜間の距離よりも鼓膜の直径の方が大きい。

亜種アズマヒキガエルの幼生は全長 3 センチメートルで、体色は黒色や濃褐色。(ウィキペディアから引用)

ヒキガエルは目の後ろに耳腺という毒の入った袋を持っています。

通常の扱いでは毒を出すことはありませんが、かなり乱暴に、手荒な扱いをすると白い液を出します。

じわっと出ることもあれば、ピューッと飛び出ることもあるようです。たまに、犬がヒキガエルをもてあそんで、泡を吹いているということがあるそうです。実は先日、ものはためし？と、耳腺を絞って 0.5mm のシャーペンの先ほどの液を舐めてみたら、苦い味がしました。そのときはそれだけだったのですが、しばらくして、舌がしびれているのに気付きました。ほぼ小一時間ほど、続きました。結構強い毒のようです。その名もブフォトキシン、ブフォとはヒキガエルの学名です。

<http://www.ztv.ne.jp/uedabyon/hikigaeru.htm>



アマガエル

体長は2.0 - 4.5センチメートル程で、メスの方が大きく、通常オスは4センチメートル以下[4]。鼻筋から目、耳にかけて褐色の太い帯が通っている。前足に4本、後足に5本の指があり、すべての指先に丸い吸盤がある。この吸盤で枝から枝へ飛び移ったり、ガラスの垂直面に張りつくこともできる。

皮膚はつるつるした粘膜に覆われるが、この粘膜からは体を細菌などから守るため毒が分泌されている。手で触る分には問題ないが、傷ついた手で触ったり、触った手で目や口を擦ったりすると、激しい痛みを感じ、目に入った場合は失明することもある。本種に触れた手では目や傷を触らず、手洗いすることが望ましい[4]。（ウィキペディアから引用）



11 セアカコケグモ

オーストラリアでは古くから代表的な毒グモとして知られており、抗血清も存在する。日本でも、発生地域の医療機関で抗血清を準備しているところがある。メスに咬まれた部位は激しい痛みを感じた後に腫れ、全身症状（痛み、発汗、発熱など）が現れることがある。重症化することは少ないが、全身症状が現れた場合には119番に通報し救急車を要請し、医療機関で診察を受けることが望ましい。（ウィキペディアから引用）



12 毒ヘビ

ニホンマムシ

全長45 - 60センチメートル。まれに体長が1メートル近くになる。全長に比して胴が太く、体形は太短い。尾は短い。

毒性はハブよりも強いが、体が小さいため毒量は少ない。

咬傷を受けると局所の疼痛、腫脹がおきる。局所の疼痛はしばらくすると収まるが、腫脹により神経が圧迫されることで腫脹部全体の疼痛が発生する。腫脹の進行は症例によって異なり手を噛まれた場合でも肩に達するのが数時間の例もあれば、2日かかった例もある。出血作用は強くないものの、血小板が凝集することで血中の血小板が減少し止血作用を失う。これに出血作用が加わることで皮下や消化管などの全身で持続性の出血が起こる。骨格筋が溶解し筋肉中のミオグロビンが血液中に流出し、ミオグロビン血症・褐色尿を引き起こす。全身の腫脹によって循環血液量が減少することで腎機能障害を引き起こす原因になったり、ミオグロビンの流出量が多いと腎臓の糸状体で詰まることで腎組織が壊死する。出血と末梢血管の膨張により血圧が下がり、ショック状態になることもある。重症化した例は大きく分けると腫脹が強く急性腎不全を起こす例か、腫脹は顕著でないものの咬傷後数時間で播種性血管内凝固症候群（血小板が激減し全身性の出血・血圧低下）を引き起こす例に分かれる。死亡例の多くは受傷後、3 - 4日後に集中する。重篤な場合は、呼吸不全



平地から山地の森林、藪に棲む。水場周辺に多く出現し、山間部の水田や小さな川周辺で見かけることも多い。時に田畑にも現れる。日周活動は季節や地理変異があり、例として九州の個体群は4 - 5月・10月は昼行性傾向が強く、6月 - 9月は夜行性傾向が強い。危険を感じると頸部をもた

げ舌を出し入れする、尾を細かく振るわせて威嚇音を出す、肛門腺から臭いを出すなどの行動を行う。樹皮が粗ければ木に登ることもあり、幼蛇は壁面に登ることもある。11月 - 翌3月は冬眠し、冬眠前後の温暖な日には日光浴を行い体温を上げる。

野生下ではアカネズミ・ヒミズなどの哺乳類、キビタキなどの鳥類、ニホンカナヘビ・ヒバカリなどの爬虫類、カエル類・アカハライモリなどの両生類、ウキゴリ・ニホンウナギ・ドジョウなどの魚類、ムカデ類などの節足動物を食べた例がある。共食いも行う。

咬傷被害は手への被害が多く農作業や山菜採り・キノコ狩り・草刈りなどの際の被害例が多いが、捕獲時の咬傷被害例もある。足への咬傷被害ではぞうりなどを履いていた例が多い。咬傷を受けた場合119番通報の上、救急車の出動を要請し、安静にする。身体を激しく動かすと体液の循環が促進され、その分毒のまわりが早くなる。ただし、救命救急医らのグループによる全国調査によれば、結果的には走ってでもいち早く医療機関を受診する方が軽症で済むことが分かったという。牙跡は通常2ヶ所（1 - 4ヶ所である場合もある）で、現場で可能な処置は、咬傷部より心臓側で軽く緊縛（緊縛も後述の乱切や吸引同様、問題視されつつあり、するのであれば軽く緊縛するのが無難である）。毒蛇に咬まれた時の応急措置として「口で毒を吸い出す」と言われているが、『素人による切開・毒素の吸引は行わない』こと。口腔内に傷がない場合は効果的である。

咬まれた時の時間や状況は説明出来るように必ず覚えておく必要がある。

速やかに処置可能な医療機関でマムシ抗毒素血清投与などの治療を受ける。6時間以内の血清投与が推奨されており、少なくとも24時間は経過観察が必要。血清投与に際しては、アナフィラキシー・ショックに十分注意し投与する（また、医療機関における乱切や吸引も問題視されつつある）。血清投与後、7 - 10日して2 - 10パーセントで遅延型アレルギーを起こした場合は、ステロイド剤や抗ヒスタミン剤を投与する。（ウィキペディアから引用）

ヤマカガシ

全長60 - 120センチメートル。頭胴長は55 - 120cm。丹沢山地では1972年8月、全長142センチメートルで太さが牛乳瓶ほどの個体が捕まったことがある。体色は地域変異があり、関東地方の個体群は体側面に赤色と黒色の斑紋が交互に入る。関西地方の個体群は体側面の斑紋が不明瞭。近畿地方西部から中国地方の個体群では青色型もみられる。

毒牙は上顎の奥歯にあり、0.2センチメートル以下と短い。毒線（デュベルノワ腺）を圧迫する筋肉が無いと、一瞬噛まれただけでは毒が注入されないこともある。

毒性は強い血液凝固作用で、血管内で微小な血栓形成を引き起こす。咬傷直後には局所的な激しい痛みや腫れはあまり起こらない。毒が患部から血液に入ると、血液凝固作用によりフィブリンノーゲンが大量に消費される。フィブリンノーゲン、続けて血小板が血栓の形成に伴い減少することで全身の血液が止血作用を失う。並行して血栓を溶かす作用（線溶血性）が亢進し、毛細血管が多い鼻粘膜・歯茎・消化器官・肺からの出血、全身の皮下出血を引き起こす。出血あるいは血栓が原因と考えられている一過性の頭痛が起こることがあり、頭痛が発生した場合は毒量が多いと考えられ重症化する例が多い。赤血球が血栓で狭窄した血管を通る際に損傷し、赤血球内のヘモグロビンが血中あるいは尿に溶出するため褐色尿も見られる。

頸部皮下にも毒腺（頸腺）があり、頸部を圧迫すると毒が飛び散る。これが目に入ると結膜・角膜の充血や痛みを生じ、結膜炎や角膜混濁・角膜知覚麻痺・瞳孔反応の遅延・虹彩炎などの症状の他、最悪の場合失明を引き起こす。この頸腺の毒は、餌であるニホンヒキガエルの持つ毒（ブフォトキシン）を貯蓄して使用していることが明らかになった。

（ウィキペディアから引用）



13 ヤマビル

ヤマビルは、サル、イノシシ、シカなどの増加につれて分布域を広げているという話もある。2008 年までに、日本でヤマビルによる被害が確認されていないのは埼玉県、大阪府、福井県、石川県、青森県、北海道、山口県、北部九州、四国である。ヤマビルは靴につくとシャクトリムシのように体の上の方に上がって行き、服や靴の裾や袖口などの隙間からもぐりこんで皮膚に到達する。かまれてもヒルの唾液に麻酔成分があるため痛みを感じないまま血を吸われ、吸血痕からの出血を見て気がつく場合がある。また、血液の凝固作用を妨げる成分も含まれていて、1 時間程度は血が止まらず、流血が広がりやすいが、通常、傷は数日で治る。ヒル自体には毒性はないといわれる。吸血種の主な種類は、チスイビルやヌマビル、ヤマビルなどがある。



対策

帽子・長袖・長ズボン・厚手の靴下・長靴（あるいはしっかりした登山靴）を着用し、首筋にタオルを巻いたり、靴とズボンの隙間をガムテープを巻くなどして極力肌の露出を避ける。ただし、ズボンを着用している状態であっても、ズボンを這い上がったのちに上着の隙間から入り込んで腹部に吸着する場合がある。タオルや靴下にあらかじめ塩をすり込んでおくなどの処置も有効である。

市販のヒル忌避薬を使用すると効果的である。ヒル忌避薬の主成分はディートであるため、ディート含有率の高い虫除けスプレーでも代用できる。ディート含有率の低いものであっても一時的ながら効果がある。最近では、子供を持つ母親によるディート離れの活動が起きていることから、ディート無添加のヒル忌避剤も発売されている。（ウィキペディアから引用）

14 トビ（お弁当に注意）

ほとんど羽ばたかずに尾羽で巧みに舵をとり、上昇気流に乗って輪を描きながら上空へ舞い上がる様や、「ピーヒョロロロロ…」という鳴き声はよく知られており、日本ではもっとも身近な猛禽類である。

餌は、主に動物の死骸やカエル、トカゲ、ネズミ、ヘビ、魚などの小動物を捕食する。都市部では生ゴミなども食べ、**公園などで弁当の中身をさらうこともある**ので、肉食と言うより、雑食性の可能性も高い。（ウィキペディアから引用）



15 毒キノコ

毒性を持つキノコは種類も多く、また誤った分別方法などが言い伝えられているので、専門家以外は手を出さないことである。

ドクツルタケ



カエンタケ（触るだけで危険）

分布

日本・中国・ジャワ島などに産する。中央アメリカ（コスタリカ）からもきわめて近い種が報告されている。

日本国内では、カシノナガキクイムシによるブナ科の樹木の枯死例（いわゆる「ナラ枯れ」）が増えており、これに伴ってカエンタケの発生例も普遍的なものになりつつあるという指摘がある。

毒性

致死量はわずか3g（子実体の生重量）程度と極めて強力である。日本では6例ほどの中毒事例が報告され、計10名の中毒患者が出ており、そのうち2名は死亡している。また、触るだけでも皮膚がただれる。

症状

摂取後 10 分前後の短時間で症状が現れる。初期には消化器系の症状が強く、腹痛・嘔吐・水様性下痢を呈する。その後、めまい・手足のしびれ・呼吸困難・言語障害・白血球と血小板の減少および造血機能障害・全身の皮膚の糜爛・肝不全・腎不全・呼吸器不全といった多彩な症状が現れ、致死率も高い。また回復しても、小脳の萎縮・言語障害・運動障害、あるいは脱毛や皮膚の剥落などの後遺症が残ることがある。（ウィキペディアから引用）



16 うるし

本種をはじめ、近縁種はアレルギー性接触性皮膚炎（いわゆる「ウルシかぶれ」）を起こしやすいことで有名である。これは、ウルシオールという物質によるものである。人によっては、ウルシに触れなくとも、近くを通っただけでかぶれを起こすといわれている。また、山火事などでウルシなどの木が燃えた場合、その煙を吸い込むと気管支や肺内部がかぶれて呼吸困難となり、非常に危険である。果実はゆがんだ扁平の核果で、10月ごろ成熟して黄褐色となる。



（ウィキペディアから引用）

山うるし

樹液に触れるとかぶれる。人によっては、ウルシに触れなくとも、近くを通っただけでかぶれを起こすといわれている。



（ウィキペディアから引用）

ハゼノキ

東南アジアから東アジアの温暖な地域に自生する。日本には、果実から木蠟を採取する資源作物として、江戸時代頃に琉球王国から持ち込まれ、それまで木蠟の主原料であったウルシの果実を駆逐した。

ウルシほど強くはないが、かぶれることもあるので注意が必要。



ツタウルシ

葉は、晩秋に赤や黄色に紅葉する。

日本では、北海道、本州、四国、九州に分布し、山地の落葉樹林内に生育する[5][6]。高木などの幹に気根を出して巻き付いたりなどして這い上がり、または日の当たりのよい場所の倒木や岩盤、道路法面のコンクリート擁壁などを這いまわる。

有毒成分

葉に漆成分のラッコールが含まれるため、触れるとひどくかぶれることがある。



(ウィキペディアから引用)

17 イソギンチャク

イソギンチャク 海の花にも棘があります

イソギンチャク海の中でユラユラと潮の流れに身を任せて漂っている姿は、見るものを魅了するものがあります。また、一部の魚や甲殻類にとっては身を守るための大変重要な役割を果たしています。

イソギンチャクの毒

イソギンチャクはたくさんの触手で近づいたプランクトンや小魚を捕獲して食べることはご存知の事と思います。つまり、多かれ少なかれイソギンチャクは、その触手に毒を持ち、それにより捕食を行っているのです。イソギンチャクは種類により持っている毒も様々ですが、「タンパク毒」と「神経毒」に大別できます。



毒性の強いイソギンチャクには、岩のように見える「ウンバチイソギンチャク」や「イワスナギンチャク」、カリフラワーのような「ハナブサイソギンチャク」がいます。また、それよりもやや

毒性は低いですが、「スナイソギンチャク」などにも注意が必要です。

(被害) 刺されると

イソギンチャクの中には岩なのか海藻なのか区別のつかないようなモノが存在し、不注意から触れてしまい刺されてしまう場合が多いようです。イソギンチャクの中には非常に美しいものから、エビやカニ、そしてクマノミと共生するものも多く、見るものに油断を与え、つい、うっかり・・・。

毒性の弱いイソギンチャクに刺された場合は、大した炎症も起こらず、患部が少々腫れたり、痒みを持ったりする程度です。しかし、毒性の強いものに刺されると、激痛が伴ない、患部は腫れ上がり、発熱、全身の疼痛が起こります。ひどい場合は、患部が強い痒み、潰瘍、壊死を起こします。また、完治するまでの時間がかかり、ウンバチイソギンチャクに刺されて、治るまで1年半以上かかったという例も報告されています。

(応急処置) もしもの時の対処法

刺された部分は擦らずに、海水できれいに刺胞を洗い流して下さい。腫れ、発熱がある場合は氷や冷水で冷やして下さい。軽度の場合は、放っておいても大事に至りませんが、痛みや痒み、炎症が激しい場合は病院で適切な手当を受けて下さい。応急処置として食酢やアルコールをかけると炎症が和らぐ場合がありますが、イソギンチャクの種類により対処法が異なりますので、ハッキリしない場合は、絶対に使わないで下さい。

(COPYRIGHT© 2003-2010 N E T d e 水族館 All Rights Reserved から引用)

18 ウニ

危険な針で一杯です

ガンガゼ濃厚で甘味があり、舌の上でトロ〜リ溶けるウニが大好きという人は多いと思います。でも、海の中はそんなに美味しいウニばかりではありません。体中を鋭い棘で覆い、鉄壁の鎧を身にまとい、近づく者は容赦なく攻撃してくる、怖〜いウニも海の中には存在しています。



ウニの毒

ウニが毒を持っているのか？海の中で危険なウニは、イイジマフクロウニ、ガンガゼ、ラップウニの仲間、この中でも特に被害に遭う可能性が高いウニはガンガゼでしょう。これらのウニは、棘に毒を持っています。この毒の成分はタンパク質から成っていますが、詳しいことは、今のところ解明されていません。

被害 刺されると

ウニに刺される人の多くは不注意からです。特にガンガゼは、ナガウニやムラサキウニと勘違いして手を出して刺される場合が多いようです。また、岩陰に隠れていたり、浅瀬にいたため、間違って踏みつけたり、うっかり手や足を入れて刺さることがあります。イイジマフクロウニは見た目が綺麗でつい手を出したくなるようなウニです。ダイバーの中には、ウニと共生するエビやカニを観察しようと、近づきすぎて誤って棘に触れて受傷するといったケースもあります。

これらに刺されると激痛を伴ない、周囲が腫れ、場合によっては痺れや麻痺を起こします。特にガンガゼの棘は長く折れ易く、ギザギザが付いているため、棘が抜け難く患部に残る場合が多いため、受傷部が化膿することがあります。

毒性の強いイイジマフクロウニの場合は、痛みや腫れは他のウニ同様に起こりますが、重篤の場合に死亡するケースが報告されています。

応急処置 もしもの時の対処法

患部を水で洗い刺された部分から棘を取り除いて下さい。毒がタンパク質であることから、火傷しない程度の熱いお湯に30分～1時間漬けていると毒が不活性化し痛みが治まってきます。後は至急病院へ行き手当てを受けて下さい。特に注意する点は、患部に棘を残さないことです。残っていると、その部分が化膿したり、なかなか完治しないことがあります。

(COPYRIGHT© 2003-2010 N E T d e 水族館 All Rights Reserved から引用)

19 オコゼ (ハオコゼ)

成魚の体長は10～12cm。側面形は寸が詰まり体高が大きい。頭部は体長のわりに大きく、口吻は短くずんぐりとしている。背鰭が前方に向かって頭部にまで伸び鶏冠のように発達し、櫛状の鰭条は毒腺になっている。

体色は白、赤、黒、褐色が鮮やかな地図状に入り交じって保護色をなしており、それらがまた無数の個体変異を示す。

本州以南の日本各地、朝鮮半島の浅い岩礁や潮間帯に生息する。特に岩や水草等の障害物のある場所に多い。稚魚～幼魚は潮だまり等でみられる。

肉食性で、無脊椎動物や他の小型魚類を捕食する。

防波堤釣りの外道として釣れる事が多く、また潮だまりでもしばしば目にするが、他のオコゼ類同様、背鰭の棘に毒があり、刺されるとひどく痛む。

(ウィキペディアから引用)



20 アイゴ

成魚は全長 30cm ほどで、体は木の葉のように左右に平たい。体色は緑褐色の地に褐色の横縞が数本あり全身に白っぽい斑点があるが、この斑点は環境や刺激によって素早く変化する。口は小さいが唇は厚い。皮膚は比較的厚く丈夫である。

背鰭・腹鰭・臀鰭の棘条は太く鋭く発達していて、それぞれに毒腺を備える。この棘に刺されると毒が注入され、数時間-数週間ほど痛む。刺された場合は 40-60℃ほどの湯に患部を入れると、毒素のタンパク質が不活性化するので痛みを軽減させることができる。冬場は肌寒いこともあり痛みが和らぎにくい。アイゴが死んでも棘の毒は消えないので、漁獲したら刺されないようはさみなどでとげを切断しておくのが望ましい。

(ウィキペディアから引用)



21 ゴンズイ

体長 10cm～20cm。茶褐色の体に頭部から尾部にかけて 2 本の黄色い線があり、幼魚ほど鮮やかである。

背びれと胸びれの第一棘条（毒棘）には毒があり、これに刺されると激痛に襲われる。なお、この毒は死んでも失われず、死んだゴンズイを知らずに踏んで激痛を招いてしまうことが多いため、十分な注意が必要である。毒の成分はタンパク毒であ



るため、加熱により失活する[1]。

主に浅場の岩礁や防波堤付近などに群れる。集団で行動する習性があり、特に幼魚の時代に著しく、彼らの群れは巨大な団子状になるため、「ごんずい玉」とも呼ばれる。この行動は集合行動を引き起こすフェロモンによって制御されていることが知られている。

夜行性。夜間に磯や防波堤周辺を回遊するため、釣獲されることが多い。

食用

ナマズの仲間であるため、成魚になるとナマズとよく似た姿となる。毒針のせいで嫌われるが、毒針さえ取り除けば白身の美味しい魚であり、味噌汁や煮物、天ぷらなどで食される。

(ウィキペディアから引用)

22 クラゲ

浅い海岸でも安心できません

海水浴に出掛けてクラゲに刺されたことのある人は少なくないと思います。

クラゲの毒はタンパク質からなる溶血成分、タンパク質分解成分などなど多様な成分から出来ており、詳しくは解明されていません。また、クラゲの種類によってもピリピリする程度のものから激痛を伴ない、生命に関わるものまで様々です。



刺されると

海水浴中の事故が最も多いのではないのでしょうか。クラゲは海岸間際の浅い所まで、フワフワと潮に乗ったり風に吹かれたりしながらやってきます。クラゲの傘の部分は小さくても、その下に伸びる触手は異様に長く、数メートルに及ぶことも在ります。その為、クラゲを見つけた時には「時、既に遅く」で刺されてしまっている事が多々あります。

全てのクラゲが強烈な毒を持っているわけでは有りません。特に注意が必要なクラゲはカツオノエボシ、ハブクラゲ、アンドンクラゲ、アカクラゲなどです。これらの危険なクラゲに刺されると、その部分に灼熱間のある激痛が走り、やがて赤紫色に腫れ、触れた所がミミズ腫れになります。場合によっては水ぶくれになることもあります。更に重症の場合は、致命的になる事があります。また、繰り返し刺されるとアナフィラキシーショックを起こす場合があります、一刻を争う事態となります。

応急処置 もしもの時の対処法

刺された場合、焦ってその部分を擦るような事は絶対にしないようにして下さい。擦ると残った刺胞が刺激され更に被害を大きくします。

まずは、海水で擦らないようにしてきれいに洗い流して下さい（真水を掛けると刺胞を刺激して更にひどくなる）。

そして、残った刺胞を丁寧にピンセットなどで取り除いて下さい（素手では触らない事！）。

患部を冷やし病院へ急行し適切な処置を受けて下さい。

ハブクラゲやアンドンクラゲに刺された場合は、患部に食酢をかけると刺胞の毒が分解されます。

沖縄の海水浴場には緊急手当用の食酢が用意されています。

カツオノエボシに刺された時は、アルコールかアンモニア水をかけて応急処置する。

種類がわからない場合は、食酢やアルコールをかけないように！更にひどくする場合があります。

クラゲの被害に遭わないために

出来るだけ肌の露出を避けることが有効ですが、海水浴に来てそれはちょっと無理があります。クラゲの発生注意が出たらまず海に入らない事、沖縄のビーチでは、クラゲ避けネットの内側で遊ぶことが大切です。また、ダイビングやサーフィンをする時は、肌の露出の少ない長

袖のスーツを着るなどの注意が必要です。

(COPYRIGHT© 2003-2010 N E T d e 水族館 All Rights Reserved から引用)

カツオノエボシ

大きさ約 10cm ほどの透き通った藍色の浮き袋をもつ。中には気体（主に二酸化炭素）が詰まっており、これで海面に浮かぶ。浮き袋は常に膨らんでいるわけではなく、必要に応じてしぼみ、一時的に沈降することもある。また浮き袋には三角形の帆があり、風を受けて移動することができる。カツオノエボシ自身には遊泳力はほとんどない。

浮き袋から海面下に伸びる触手は平均 10m 程度、長いもので約 50m にも達する。触手が何らかの刺激を受けると、表面に並んでいる刺細胞から刺胞が発射される。刺胞には毒が含まれ、獲物の小魚や甲殻類を殺して食べる。また敵から身を守る防御の役割もある。

危険性]

人にとって非常に危険な生物である。触手に強力な毒をもち、刺されると強烈な電撃を受けたかのような激痛がある。患部は炎症を起こして腫れ上がり、痛みは長時間続く。二度目に刺されるとアナフィラキシー（アレルギー反応の一種）を起こし、ショック死する危険がある。

カツオノエボシの触手に触れると、表面にある細胞から刺胞という微小な毒針が発射される。これに含まれる毒が炎症や痛みを引き起こすのである。

刺胞は接触の刺激により発射されるので、触手に触れてはならない。

真水や酢による刺激にも反応して発射されるので用いない方がよい。通常のクラゲ刺傷には酢が有効とされているが、本種では逆効果である。

海岸や砂浜に打ち上げられたものにも触れない方がよい。刺細胞は物理的な刺激に反応しているものであり、本体の生死や意志に関係なく刺胞は発射される。

カツオノエボシは普段沖合を漂っているが、風によって海岸近くまで吹き寄せられてくることがあり、このとき被害が起きやすい。体は透明で青みがかったいため海の色に溶け込み、遠くから見つけるのは困難である。海面下に垂れ下がっている触手も見分けにくい。

刺されたことによってパニックに陥り溺れることがあるので、まずは落ち着いて岸に戻ることが先決である。その後は体に絡み付いている触手を取り除く。このとき素手で取り除こうとすると二次的に刺されることになるので、海水で洗い流すか、ごく厚手の手袋など手を保護できるものを使う。

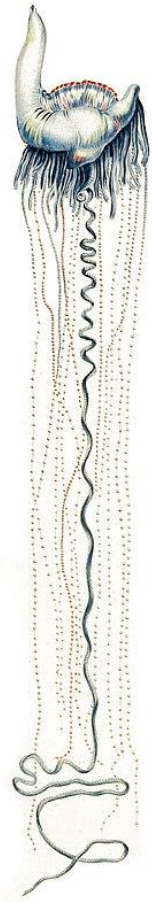
なお、台風が太平洋岸にやってくると大洋海面に生活する様々な動物が吹き寄せられ、カツオノエボシも多数打ち上げられることがある。乾燥した本種はきれいな青いプラスチックケースのようになるが、これにさわるのも注意を要する。湿気を吸うとちゃんと刺胞が発射され、生きたものほどではないものの、それなりの痛みを感じる。

治療

応急処置は患部を 45° C 程度の湯に浸すか、氷で冷やすかの二通りがある。またアンドククラゲやアカクラゲなどとは異なる仲間なので、同じ処置が効かない、もしくは逆効果になる場合があり注意が必要である。

正しい方法

海水で洗い流す、近くにあるタオルやプラスチックボードを使用して触手を除去する（素手で除去しない）。除去した後、氷や冷水で冷やし、医療機関で治療する。対症療法として、抗ヒスタミン剤の軟膏や副腎皮質ホルモン配合の軟膏を塗布することがある。クラゲ除けローションを事前に肌に塗っておく。



誤った俗説

砂をかけてもむようにして刺胞を取る（刺胞を肌にすり込んでしまう）。

酢をかける（酢はハブクラゲ刺傷への応急処置としては有効だが、カツオノエボシに対しては、その刺激で余計に毒が出てしまいったくの逆効果である）。

真水で洗う（真水で洗うと、浸透圧の差で、刺胞の毒液が体内に流れ込みやすくなる）。

（ウィキペディアから引用）

23 ウツボ

温暖な地域の浅海に生息する海水魚で、鋭い歯と大きな口を持つ大型肉食魚でもある。

大きさは全長 20 センチから 4 メートルまで幅広いが、全長 1 メートル前後の種類が多い。

口は大きく目の後方まで達し、鋭い歯が発達する。

潮溜まりに這い上がって小魚を狩ったり、岩場で魚をさばいている釣り人のところへ上がってきたりすることがあり、表皮が湿っていれば粘膜を介した皮膚呼吸によって 30 分ほどは水中でなくても活動が可能なので注意を要する。

しかし、基本的には巣穴からあまり動かず、岩陰や洞窟に潜んで獲物を待ち伏せるが、夜になると海底近くを泳ぎ回ることもある。食性は肉食性で、魚類・甲殻類・頭足類などの小動物を大きな口で捕食する。特にタコ類にとっては有力な天敵の一つとなっている。またテトラポッドや岩礁の食物ピラミッドの頂点である。

自分より大きな敵が近づいた時は大きな口を開けて威嚇し、それでも敵が去らない場合は咬みつく。毒はないが歯は鋭く顎の力も強いので、人間が咬みつかれると深手を負うことになる。ウツボ類の分布域では、潜水や釣りなどの際に十分な注意が必要である。但し見た目のイメージと違い臆病な所もあり、人間の側から無用な攻撃や接近をしない限りは積極的に噛み付いてくることは少ない。（ウィキペディアから引用）



24 ヒョウモンダコ

マダコ亜目 マダコ科 ヒョウモンダコ属に属する 4 種類のタコの総称。日本ではその中の一種 *Hapalochlaena fasciata* を指すことが多い。小型だが唾液に猛毒のテトロドトキシンを含むことで知られ、危険なタコとされる。

一般に日本の小笠原諸島、南西諸島以南[1]の太平洋からオーストラリアにかけての西太平洋熱帯域・亜熱帯域に分布し、浅い海の岩礁、サンゴ礁、砂礫底に生息する。

体長は 10cm ほどの小型のタコである。他のタコと同様に体色をすばやく変化させることができ、周囲の岩や海藻にカモフラージュするが、刺激を受けると青い輪や線の模様のある明るい黄色に変化する。この模様がヒョウ柄を思わせることからこの和名がついた。

ヒョウモンダコは唾液にフグと同じ毒のテトロドトキシンを含み、身の危険を感じるとこの唾液を吐いたり、噛み付いて注入する。咬症により噛まれた生物はテトロドトキシン中毒により死亡することがある。ただし、個体によっては噛まれたときにテトロドトキシンによる麻痺症状ではなく難治性の皮膚潰瘍のみが生じることが知られている。また、食しても危険とされる。

（ウィキペディアから引用）



ヒョウモンダコにご注意ください！

目撃情報

千葉県沿岸におけるヒョウモンダコの目撃情報は、報告数は少ないものの 以前から確認されています。

＜最近の目撃例＞

平成29年3月17日 鋸南町

平成29年5月3日 南房総市千倉町

危険性情報

ヒョウモンダコは大きさ 10cm 程の小さなタコで、刺激を受けて興奮すると青色のヒョウ柄の模様を体表に発色する特徴があります。唾液には神経毒であるテトロドトキシンをもっており、海外では咬まれて死亡した例も報告されています。

普段は岩肌と同じような体色をしており、発見しにくいので注意が必要です。

ただし、ヒョウモンダコから人に危害を加えることはなく、捕まえるなど人のほうから手を出さなければ危険はないようです。磯遊び等をされる際には怪我を防ぐことも含めて手袋や水中用のブーツを身につける等して体表を防護するとともに、発見した場合 にはむやみに触らないようにご注意ください。

生態・分布情報

ヒョウモンダコは西太平洋の熱帯・亜熱帯域を中心に分布していますが、千葉県沿岸でも、生息数自体は少ないものの以前から知られています。

問い合わせ先

千葉県農林水産部水産局水産課（TEL：043-223-3032）

25 アカエイ

体表はほとんど滑らかだが、背中の正中線付近には小さな棘が並び、尾に続く。尾は細長くしなやかな鞭状で、背面に短い棘が列を成して並ぶ。さらに中ほどには数-10cm ほどの長い棘が 1-2 本近接して並ぶ。この長い棘には毒腺があり、刺されると激痛に襲われる。数週間も痛みが続いたり、アレルギー体質の人はアナフィラキシーショックにより死亡することもある。

棘には鋸歯状の「返し」もあり、一度刺されると抜き難い。刺されたらまず毒を絞り、患部を水または湯で洗い流した後、早急に病院で治療を受ける必要がある。

生体を扱う際は、尾を鞭のように払って刺そうとするので充分注意しなければならない。

死んでも毒は消えないため、死体を扱う際にも尾には注意が必要である。

（ウィキペディアから引用）



26 イモガイ

世界の暖流域に分布するが、熱帯域のサンゴ礁に特に種類が多い。日本では、太平洋側では主に房総半島以南、日本海側では主に能登半島以南など、黒潮や対馬暖流などの暖流の影響の強い地域に見られる。本土では直接黒潮に接する千葉県や和歌山県、高知県などに多くの種が見られるが、南西諸島を抱える沖縄県や鹿児島県は種類が格段に増え、特に沖縄県では約 110 種を数える。

潮間帯から深海まで棲息する。捕食性で、歯舌が特化した神経毒の毒腺が付いた鋇で他の動物を刺して麻痺させて餌とする。毒は種類によって異なるが、ヒトが刺されて死亡する場合もある。

全種が肉食性で、食性により魚食性（小魚などの脊椎動物）、虫食性（ゴカイなど環形動物）、貝食性（貝類を主とした軟体動物）に分けられる。

イモガイは動作が緩慢なので、魚のような俊敏な動きの獲物に対しては、歯舌を発達させた毒鋇（矢舌とも呼ばれる）を撃ち、その体内に神経毒を注入し麻痺させて捕まえる。また身に危険を感じたときも、外敵に対してこの毒鋇を撃つ場合もある。特に魚食性や一部の貝食性のイモガイは、その毒性が人を殺すのに十分なまでに発達したものがいる。もっとも種数が多い虫食性のイモガイの毒は人間に対してさほど効かないが、そうはいっても取扱には十分に注意すべきである。

人間との関わり

イモガイは食用に供されることはほとんどないが、刺されると死に至る猛毒を有する危険生物であり、ヒョウモンダコとともに磯遊びやダイビング時における要注意生物の筆頭に挙げられている

イモガイはその貝殻の色や模様が美しく、また美しいサンゴ礁の周辺や砂浜など人目につく場所にいることが多いのでよく素手で拾い上げられるが、その後皮膚に密着させていたりすると外敵とみなされて毒鋇で刺され、死に至るケースがある。イモガイ 1 個体に含まれる毒は、およそ 30 人分の致死量に相当する。アンボイナ *C. geographus* は俗に英語で cigarette snail（葉巻貝）と呼ばれているが、これは、タバコを一服する間に死を迎えるという意味である。同種は沖縄県でもハブガイ、ハマナカーといった俗名があるが、前者はその毒性を毒蛇のハブに喩えたもの、後者は刺されたら陸に辿り着く前に浜の途中で死ぬ、といった意味を持つ。毒鋇は、ときに軍手やウェットスーツさえ突き抜ける。琉球列島では 1896-1996 年の間に確認された被害例が 30 件あり、死亡例はそのうち 8 件、それらはすべてアンボイナによるものであった。加害例そのものではほかにニシキミナシ、タガヤサンミナシ、ヤキイモの例があった。

イモガイの刺した直後は全く痛みを感じず、自覚がないことがほとんどであるが、その後しばらくして患部に激痛が生じ、続いて痺れ、腫れ、疼き、めまい、嘔吐、発熱といった症状が出る。ひどい場合は、視力や血圧の低下、全身麻痺、さらには呼吸不全により死に至る。イモガイの毒には抗毒血清がないので、毒が被害者の体内で代謝され抜けきるまで、なんとか生命を持ちこたえさせることが唯一の救命策である。アンボイナではその毒は神経性で、呼吸筋の麻痺によって死に至るが、心筋や中枢神経には被害が及ばないため、人工呼吸器で対応することで乗り切れるとのこと



アンボイナ



（ウィキペディアから引用）

27 トコジラミ (ナンキンムシ)

トコジラミは、別名 ナンキンムシとも呼ばれ、カメムシ目に属する昆虫です。

吸血性の昆虫で、近年、都市部や地方の観光地を中心に日本各地で発生し問題となっています。



トコジラミによる主な被害

人に対する一番の被害は吸血刺咬による「かゆみ」です。刺咬箇所は皮膚を露出させている足や腕、首、腹部などで多く見られます。

・感染症について

吸血昆虫のため、蚊のように感染症の媒介が懸念されますが、現在のところ感染させた例は報じられていません。

トコジラミ (ナンキンムシ) の生態

トコジラミ 成虫 幼虫 卵(卵) : 大きさ 1mm 程の乳白色で、家具の隙間など表面がざらざらしたような箇所に産み付けられます。(幼虫) : ふ化幼虫は1~2mm 程と非常に小さく、色も薄い褐色なので、室内では見つけにくいことがあります。

トコジラミは脱皮を繰り返し、5 齢を経て成虫になります。(成虫) : トコジラミ成虫は体長 5~8mm 程で、体は円盤状の平ら、体色は赤っぽい茶色をしています。口は細長い針状で吸血に適した形になっています。動きは敏捷ですばやく歩き回ります。成虫になっても翅は生えないので、飛ぶことはできません。(食性) : 幼虫・成虫ともに人や動物(哺乳動物・鳥類)から吸血します。

主に夜間に徘徊して吸血しますが、条件によっては昼間でも吸血することがあります。(生活史) : トコジラミの雌成虫は1日に2~5粒の卵を隙間に産み付けます。卵は6日前後(温度によって異なる)でかえり、幼虫はすぐに吸血を開始します。幼虫は1~3ヶ月の期間を経て成虫になります。成虫の寿命は長く、室温条件(18~20℃)下で1年近く生きることがあります。また、冬季の低温時期は飢餓に対する抵抗力が大きく、13℃下では約1年間 飢餓に耐えるという報告があります。



トコジラミ (ナンキンムシ) の生息場所

トコジラミ 畳 寝具の隙間に発生トコジラミは暗くて狭い隙間を好んで潜伏します。(主な潜伏場所) 柱や床板、壁面、壁紙の裂け目、ベッドやタンスなど家具の隙間・継ぎ目、布団などの寝具類や衣類、畳の継ぎ目、壁紙や書籍、書棚の隙間、カーテンの裏・カーテンレールの隙間、額縁・壁時計の裏などあらゆる家具・建物の隙間を利用して集団で生息します。生息数が増えると排泄物の糞が多数付着し、黒褐色に汚れていきます。この血糞跡が駆除するにあたり、生息場所を探すための調査ポイントになります。

トコジラミ (ナンキンムシ) の発生経路・原因

トコジラミは主に人や物と一緒に運ばれて、持ち込まれます。海外からの旅行客や荷物などと一緒に国外から入ってくるだけでなく、トコジラミが発生している国内の施設を利用した場合、その利用者の衣服やカバンなどにトコジラミが紛れ込んでいて、そのまま自宅へ持ち帰ったり、自宅に発生したトコジラミを住人が知らずに他へ持ち運んだり、トコジラミの付いている家具とは知らずに再利用する、など様々なケースがあります。

トコジラミは吸血源があれば容易に住み着くため、発生場所が「不衛生」や「清潔にしているから大丈夫」といったこととは関係ありません。

生息調査 (トコジラミトラップ BB トラップクリア)

トコジラミ駆除をした後は、駆除効果が出ているか確認する必要があります。方法としては、目視による確認や刺咬被害の有無、またトラップを用いた方法などがあります。トコジラミ用の調査トラップの1つとして、写真のような透明樹脂ケース式の粘着トラップがあります。ケースが透明のため、トコジラミの捕獲状況が一目で分かります。

(虫知識.COM から引用)

28 ノミ (蚤)

蚤 (のみ) はノミ目に属する吸血性の昆虫で、日本からは約 80 種が知られます。

ノミによる被害

ノミは成虫が哺乳類や鳥類から吸血します。ノミに刺されると激しい痒みに襲われ、みずぶくれやかさぶたができます。

ノミの生態

ノミ駆除 ネコノミ日本には約 80 種が知られていますが、被害例が多い種としては「ネコノミ」や「イヌノミ」が挙げられます。

成虫の体長は 2～3mm で、吸血は雄・雌成虫ともに行ないます。雌成虫は吸血 2 日後くらいから産卵をします。卵の大きさは 0.5mm ほどです。卵からかえった幼虫はゴミの中の有機物や親の排泄物を食べて、体長 4.5mm 前後にまで成長します。その後、蛹になり成虫へととなります。卵から成虫になるまで 22℃では 15 日を要します(温度によって異なる)。ネコやイヌなどの動物の他、人にもよく集り、吸血します。

ノミ対策について

ノミ対策は、吸血する「成虫」に加えて、「幼虫」対策が重要です。

発生源(幼虫)を駆除しなければ、何度も発生を繰り返すため、幼虫生息場所を特定することが重要です。

発生予防

野良猫が原因の場合は、敷地外へ猫を追い出すことも必要です。



(虫知識.COM から引用)

29 ツメダニ

● 生息場所

家屋内に生息し、コナダニやチリダニなどの他のダニを捕食。

形態 体長は 0.3～0.5mm で、淡黄褐色。

ツメダニは、ヒョウヒダニやコナダニなどを捕まえて体液を吸って生きているダニです。普通、室内では比較的数量が少ない種類ですが、築後 2～3 年を経過した家屋や新しい畳などで、ヒョウヒダニ、コナダニ、チャタテムシなどが大発生した際、それを捕食するこのツメダニも大発生する場合があります。

吸血はしませんが、夜間就寝中に這い出てきて人を刺し、傷口から唾液を入れ、さらに人の体液を吸います。刺されると、その瞬間は痒みも腫れもないですが、1～2 日経つと赤く腫れてかゆみが起こり 1 週間ほど続くことがあります。(遅延性のアレルギー皮膚炎)

刺されやすい場所は、大腿部、上腕部の内側、腹腰部などに集中し、ふとんや畳に接した側が被



害を受けやすいです。（出典 不明）

30 トリサシダニ

トリサシダニは体長 0.7mm、
イエダニによく似ているが、鳥類に寄生するダニで、全世界に分布。
ムクドリ・ツバメ・スズメなどの巣から這い出し、ヒトに移って激しく吸血する。

トリサシダニに関しては、家屋の屋根裏や軒などに営巣した野鳥の巣が原因である場合は、これら除去して焼却するとともに、フェントロチオン、ペルメトリンなどの殺虫剤を散布する。

<http://duskin-tec.com/library/001/004/002.html>

（ダスキンテック 害虫ライブラリー から引用）

31 イエダニ

- 生息場所

ネズミや鳥などの動物に寄生する吸血性のダニ。

ネズミが死んだり、巣を捨てたときに、一時的に人間に寄生して吸血する。

形態 体長 0.7mm

イエダニは、ネズミに寄生し、吸血しているダニです。寄生しているネズミが死ぬと、新たな寄生先を求めて人を吸血することがあり、これが原因で皮膚炎を発症します。

腹部や太ももから吸血される事が多く見られます。（出典 不明）



32 ヒゼンダニ

- 生息場所

ヒトに寄生するダニで、疥癬症を引き起こします。ヒトの皮膚（角質）にトンネルを掘って生息し、繁殖します。

形態 体長 0.4mm

ヒトに寄生するダニで、疥癬症を引き起こします。ヒトの皮膚（角質）にトンネルを掘って生息し、繁殖します。このトンネルを「疥癬トンネル」と呼び、肉眼でも確認することができるため、疥癬症を見分ける際の大きなポイントとなります。

ヒゼンダニの感染は、主に人から人への接触感染です。タオルや衣類・寝具などを介して感染すること多いため、病院や保育園・老人ホームなどで被害が頻発する場合があります。

感染を防ぐには、タオルや寝具を共有しないことや、通常のダニ駆除と同じように、室内や寝具を清潔に保つ、換気を十分に行うなどの対応が必要となってきます。

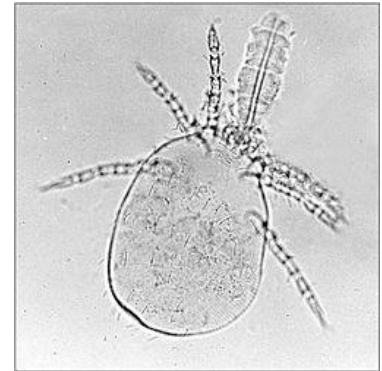
ヒゼンダニによる激しい痒みは特に夜間に増強し、睡眠を妨げられることがあります。

（出典 不明）



33 ツツガムシ

ツツガムシ（恙虫）とは、ダニ目ツツガムシ科のダニの総称。ツツガムシ科に属するダニ類は日本では約 100 種が報告されている。主に東アジア、東南アジアに分布する。成虫は赤色、幼虫はオレンジ色をしている。幼虫は野鼠の耳に寄生していることが多い。幼虫は脊椎動物寄生性で孵化後、生涯に一度だけ哺乳類などの皮膚に吸着して組織液、皮膚組織の崩壊物などを吸収する。十分摂食して脱落、脱皮した後の第一若虫、第二若虫および成虫には脊椎動物への寄生性はなく、昆虫の卵などを食べる。



0.1～3%の個体が経卵感染によってツツガムシ病リケッチアを保有しており、これに吸着されるとツツガムシ病に感染する。保有するリケッチアの血清型は、種との関連性があることが知られ、タテツツガムシは Kawasaki または Kuroki 型、アカツツガムシは Kato 型、フトゲツツガムシは Karp または Gilliam 型を保有している。

日本では、感染症法に基きツツガムシ病の症例を集計している。2009 年の症例 458 件死亡例 3 件（ウィキペディアから引用）

ツツガムシ病

ツツガムシ病は *Orientia tsutsugamushi* を起因菌とするリケッチア症であり、ダニの一種ツツガムシによって媒介される。患者は、汚染地域の草むらなどで、有毒ダニの幼虫に吸着され感染する。発生はダニの幼虫の活動時期と密接に関係するため、季節により消長がみられる。また、かつては山形県、秋田県、新潟県などで夏季に河川敷で感染する風土病であったが（古典型）、戦後新型ツツガムシ病の出現により北海道、沖縄など一部の地域を除いて全国で発生がみられるようになった。1999 年 4 月からは感染症法により 4 類感染症全数把握疾患として届け出が継続されている（図 3）。感染症法施行後の患者数をみると、1999 年（4～12 月）には 588 人、2000 年（1～12 月）には急増して 754 人が報告された。2001 年には 460 人に減少したが、今後の動向が注目される。また、毎年数人の死亡例も報告され、依然として命を脅かす疾病であることがうかがえる。また、ツツガムシ病は広くアジア、東南アジアにも存在しており、輸入感染症としても重要である。



病原体

ツツガムシ病の起因菌はオリエンティア・ツツガムシ（*Orientia tsutsugamushi*）であり、大きさはおよそ $0.5 \times 2.5 \mu\text{m}$ である（写真 1）。他のリケッチアと同様に、細胞外では増殖できない偏性細胞内寄生細菌である。本菌には血清型が存在し、Kato、Karp、および Gilliam の 3 種類は標準型とよばれ、その他にも、Kuroki、および Kawasaki など新しい型も報告されている。

（国立感染症研究所ウイルス第一部 小川基彦）